

統語的複合動詞「V-切る」「V-ぬく」の意味構造と統語 —文法化における比較に向けて—*

日高 俊夫

武庫川女子大学・神戸松蔭言語科学研究所
hidakat[at]mukogawa-u.ac.jp

Syntax and Semantics of the Syntactic V-V Compounds *V-kir* and *V-nuk*: Toward Comparison in the Grammaticalization Process

HIDAKA Toshio

Mukogawa Women's University / Shoin Institute for Linguistic Sciences

Abstract

イベント終了付近の意味を表す統語的複合動詞「V-切る」「V-ぬく」の意味と統語構造を比較分析する。具体的には、それぞれに2つの形式的語彙登録を仮定することにより、先行研究よりもシンプルかつ明示的・構成的に意味および統語構造が比較分析可能であることを示す。さらに、本論の理論装置に基づけば、2つの(補助)動詞の文法化プロセスにおける位置づけに関しても比較検討できることを主張する。

The present article compares syntax and semantics of the syntactic V-V Compounds *V-kir* and *V-nuk*, which roughly means the end of the event that the complement VP expresses. Specifically, we propose two lexical registrations for each (subsidiary) verb, which makes a simpler, more explicit, and compositional analysis on their syntax and semantics. We also argue that our lexical semantic representation enables the comparison of the two (subsidiary) verbs in the context of grammaticalization; it locates the two verbs in the process of grammaticalization.

キーワード: 統語的複合動詞、特質構造、文法化、アスペクト、モダリティ

Keywords: syntactic V-V compounds, Qualia Structure, grammaticalization, aspect, modality

*本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金課題番号 16K02652 の助成を受けている。

1. はじめに

イベント終了付近の時点を指し、一般にアスペクトを表すとされる(補助)動詞「-切る」と「-ぬく」を分析する。具体的には、形式的意味表示を用いて意味構造を分析し、それぞれの取る統語構造を明らかにした上で、意味構造と統語構造の関連を議論する。そのことにより、先行研究よりもより精密かつ明示的に意味と統語構造の関係が捉えられることを示す。また、本論の分析を通して、文法化プロセスにおける両複合動詞の位置付けに関する示唆を得る。

2. 意味表示のシステム

本論では、(1)に示す、Pustejovsky (1995)を修正したHidaka (2011)およびArai and Hidaka (2016)に準じる動詞の意味表示を用いるが、以下でその概要およびそれを用いる理由について簡単に説明する。

$$(1) \left[\begin{array}{l} \text{ARG}=[\text{統語構造における項}] \\ \\ \text{QUALIA (QL)}= \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{FORMAL (F): 時間的特性、視点に関する情報} \\ \text{CONST (C): 語彙概念構造 (LCS)} \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{TELIC (T): 当該動詞(句)が持ち得る結果} \\ \text{AGENTIVE (A): 当該動詞(句)成立のための外的要因} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

TS (Truth Conditional Section)、NTS (Non-truth-conditional Section)は、それぞれ命題的意味、非命題的意味を構成する部門を表す。後者における項は、統語構造における項として項構造に直接反映されないとすることにより、意味と統語構造の関係をよりシステマティックに記述することができる。この意味表示では、多くの動詞において意味構造の中核をなすと考えられる語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure; LCS) (影山 (1996)など)はTSのCONST (C) (構成役割)の値として導入される。しかしながら、本論で議論するようなアスペクトの詳細や視点に関する意味について、LCSのみでは記述が困難であると思われる。本表示ではそれらの情報をFORMAL (F) (形式役割)の値として記述でき、さらに、慣習的推意のような非命題レベルの意味についてもNTSに記述できる可能性を持つ。また、本論で議論する(文法化などを経て)アスペクト的な意味を表す動詞は、統語構造において先行動詞もしくは機能範疇 v が投射するVP/vPを補部とすると考えられるが、そのような動詞は、基本的には(1)のCの値を空とし、意味情報はFの値として導入される。そして、補部との単一化の際にCに補部の意味を導入することで、意味構造と統語構造の対応を無理のない形で表示できる(ただし、後に示すように、補文構造を取る場合でも常にCの値が空になるわけではなく、その値が文法化プロセスにも関わることを述べる)。

以上のように、(1)の表示は、本論が対象とするアスペクトに関する(補助)動詞の意味と統語構造を自然な形で対応させながら理論的に記述・分析することを可能にすると共に、文法化プロセスに関しても一定の記述・説明の足掛かりを提供するものと考えられる。

(2) に例示された、(1) の F にある「時間的特性」の記述は、Igarashi and Gunji (1998)、郡司 (2004) に基づく¹。

- (2) s : 行為開始時点 / f : 行為完了時点兼状態開始時点 / r : 状態終了時点
- a. 着る: $s < f < r < \infty$
($s < f$: activity $f < r$: 行為完了時点で状態変化 $r < \infty$: 行為前状態への復帰)
 - b. 死ぬ: $s = f < r = \infty$
($s = f$: achievement $f = r$: 行為開始時点で状態変化 $r = \infty$: 行為前状態への復帰なし)
 - c. 歩く: $s < f = r < \infty$
($f = r$: 状態変化なし、行為完了時点がそのまま状態終了時点)

以上、意味表示の概略と、それを用いる理由を述べた。「視点に関する情報」の詳細については以下で必要に応じて記述・説明していく。

3. 「V-切る」の意味構造と統語構造

3.1. 問題点の所在

「V-切る」の意味に基づく分類としては、森田 (1989)、姫野 (1999)、杉村 (2008)、志賀 (2014)、梅 (2015) 等があるが、いずれも直観的分類に留まっていたり、厳密な意味で先行動詞句と「-切る」の意味を構成的に分析するには至っていないと思われる²。

杉村 (2008) は本論の分析対象である「V-切る」を、「切る」に「切断の意味があまり感じられず、接辞化したもの」とし、次の3つに下位分類している³。

- (3) a. 「行為の完遂」：動作動詞に付いて、当該の事態を最後までやり残しなく完全に行うことを表す。
(例) 走り切る、食べ切る、使い切る、意見を押し切る、難局を乗り切る、耐え切る、待ち切れない、守り切る、隠し切る
- b. 「変化の達成」：変化動詞に付いて、当該の変化が最後まで滞りなく生じることを表す。
(例) 諦め切る、治り切る、信じ切る、死に切れない、日が暮れ切る、氷が溶け切る、煮え切らない態度
- c. 「極限状態」：状態動詞に付いて、すでに成立している状態が質的にさらに深まってそれ以上は進まない限界に達していることを表す。
(例) 疲れ切る、冷え切る、困り切る、濁り切る、澄み切る、広がり切る、太

¹Igarashi and Gunji (1998)、郡司 (2004) では、「行為終了時点」の後に「復帰」が定義されるが、本論には直接関係しないので以降の記述においては省略する。

²第3節の内容は、日高 (2017) を修正したものである。

³杉村 (2008) では、「前項動詞で表される行為によって事態の継続に区切りをつける」という「終結」の意味を表す例として「突き切る」「振り切る」「割り切る」「打ち切る」「踏み切る」「思い切る」等を提示し、李 (1997) の「語彙化」分析を踏襲する形で、複合動詞の形でレキシコンに登録されていると分析している。本稿もこれらの例に関しては同様の立場をとる。

り切る、頼り切る、仕事に張り切る、下がり切る

(杉村 2008, 78)

本論では、これらを2つの語彙登録で説明できることを示す。また、杉村(2008)は、次のように「対象物(目的語)の100%消費」や「イベントの進展可能性のなさが100%」を表すという、補部となる動詞句全体のイベントを考察しながら分析しているが、本論ではその知見も取り込んだ上で形式化する。

- (4) 接辞的な「-切る」は、「行為の完遂」の場合は対象物が100パーセント消費されることを含意し、「変化の達成」の場合は当該事態の裏の事態が100パーセント消滅することを含意し、「極限状態」の場合は当該事態がそれ以上進展する余剰が100パーセントないことを含意する。これらはいずれも残余がゼロになるように切り捨てていくという意味を持つ点で共通し、「切断」や「終結」の「-切る」とつながっている。(杉村 2008, 72)

梅(2015)の認知言語学を用いた分析も、複合動詞全体と「-切る」の意味が厳密に区別されているとは言い難く、「-切る」そのものの派生プロセス等は分かりにくいものの、「疲れ切る」等が主観の意味を表すという観察は重要であり、本論ではその「主観性」の形式的表示に取り組む。

本論では、以上のような先行研究の問題点を解消しつつ先行研究の知見を形式化することによって、より厳密で他の複合動詞とも比較しやすい分析を得ると同時に、文法化の程度やプロセスについても比較検討可能であることを示す。

3.2. 動詞の時間特性の記述

後述するように、本論の分析対象の「-切る」「-ぬく」においては、補部イベントの境界(特に終了点)に関する詳しい記述が必要となるので、具体的分析の下準備として、(2)の「時間的特性」について、(5)に示すように一部記述を加える⁴。

- (5) a. $s < f_{ub} = r$: シャベる、笑う、踊る
 b. $s < f_b = r$: 10分間{シャベる/笑う/踊る}
 c. $s < f_{ub} < r$: 食べる、飲む、歩く
 d. $s < f_b < r$: カレーを一皿食べる、ジョッキ一杯のビールを飲む、着る、(洗濯物が³)乾く、壊す、(富士山に)登る
 e. $s = f_{ub} = r$: ある、いる、そびえる
 f. $s = f_b = r$: (家に)2時間いる
 g. $s = f_b < r$: 死ぬ、着く、(豆腐が³)腐る
 h. $s = f_{ub} < r$: 疲れる、(根性が³)腐る、冷える、困る、困窮する、分かる、(喉が³)乾く

⁴(5e)は「 s も f も定義されず、その結果変化も起こらない」ということになるので状態動詞に相当する。また、通常状態動詞は終結点が定義されないが、「ケン³は2時間家にいた」のように動詞句になると終結点が定義可能な場合もある。なお、「開始前の状態への復帰」については本論の議論と直接関係しないので省略してある。

まず、通常「活動」とされることの多い「食べる」「歩く」等は、「しゃべる」「笑う」等の(純粋な)活動動詞と異なり、対象の状態や主体の位置が時間の経過と共に漸進的に変化していく。本論ではそれを「変化」と捉え、 $s < f < r$ として表す。

また、 f_b (bounded)、 f_{ub} (unbounded) は、それぞれ最終到達点が定義されるか否かを表す。特に説明を要するのが(5g, h)間の違いだが、これは、同じ瞬間変化的イベントでも、「死ぬ」のように変化に段階性のないものと、「疲れる」のように、瞬間的な変化の後もさらに変化が続くイベントの違いを区別する表示である。この区別は、単体のものが主語となる場合に「{だんだん/次第に/少しずつ}(～ていく/てくる)」等といった「変化の段階性」を表す副詞的表現が共起できるかどうかで動機づけられる。

- (6) a. *その虫はだんだん死んでいった。
 b. *ケン is 次第に学校に着いていった。
 c. ?*その豆腐はだんだん腐っていった。
- (7) a. 20キロを過ぎた頃から、次第に疲れていった。
 b. ?ケン is 次第に困っていった。
 c. ケンの根性はだんだん腐っていった。
 d. 冷蔵庫のビールがだんだん冷えてきた。
 e. 次第に喉が渴いてきた。

以上、「-切る」について先行研究の問題点を指摘し、本論で用いる動詞の時間的特性の記述方法について概観した。以下で具体的分析を提示する。

3.3. 意味構造

「-切る」の意味的選択制限は次のように表せる。

- (8) a. $s < f_b = r$: 一定の時間展開し、終了時点が定義される活動
 (1時間) 踊る、(10分間) 笑う、(1時間) しゃべる
- b. $s < f_b < r$: 最終時点が定義される、継続的・断続的状态変化を伴うイベント
 (ケーキを2個) 食べる、(ジョッキ1杯のビールを) 飲む、(100ccの洗剤を) 使う、(氷が) 溶ける、(病気が) 治る
- c. $s = f_{ub} < r$: 瞬間動詞で、最終到達状態が定義されないイベント
 (根性が) 腐る、冷える、疲れる、困る、濁る、澄む、太る、頼る、信じる、(喉が) 乾く、煮え切(らない態度)

(日高(2017)より)

これを踏まえ、以下では、(8a, b)タイプ、(8c)タイプの補部を取るものをそれぞれアスペクト的、モダリティ的として、日高(2017)を部分的に修正した2つの語彙登録を想定する。

まずアスペクト的「-切る」の意味表示を(9)に示す。

$$(9) \left[\begin{array}{l} \text{-kir}_{Asp} \\ \text{ARG} = \boxed{1} \text{ VP [F: } s < f_b = r \vee s < f_b < r \text{]} \\ \text{QL} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{F: POINT: } \text{kir}(\boxed{1}) = p, \\ \text{where } p = f \end{array} \right] \\ \text{C: } \phi \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

項構造では、補部に「 $s < f_b = r$ 」もしくは「 $s < f_b < r$ 」というタイプを取ることが指定されている。つまり、アスペクトを表す「-切る」が接合できるのは、次の2つの条件を共に満たす述語である。

- (10) a. 有界的ゴール(到達点や変化状態)を表す。
b. そのゴールの前に一定時間の活動もしくは変化プロセスが存在する。

特質構造の形式役割(F)を見ると、「-切る」は補部イベントの一時点 p (終了時点)を指すことが指定されている。したがって、補部イベントが「10kmを走る」のような「ゴールのある活動」を表す場合は杉村(2008)の「行為の完遂時」、「氷が溶ける」のような「ゴールのある変化」では「変化の達成時」を指す。つまり、これらの意味は、「-切る」の違いではなく補部の意味的性質の違いによって構成的に得られるもので、「-切る」の機能は「補部イベントの終了時点を指す」ということのみである。

構成役割(C)の値は空で、補部と複合するとその値が補部の構成役割の値で満たされる。これによって、理論上も「切る」が補助動詞であると位置づけられる。

モダリティ的「-切る」については、日高(2017)の形式役割(F)と主体役割(A)の値を修正して精密化した(11)を提案する。

$$(11) \left[\begin{array}{l} \text{-kir}_{Mod} \\ \text{ARG} = \boxed{1} \text{ VP [F: } s = f_{ub} < r \text{]} \\ \text{QL} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{F: POINT: } \text{kir}(\boxed{2}) = p, \\ \text{where } p > f_b \end{array} \right] \\ \text{C: } \phi \\ \text{NTS} = \left[\text{A: } g(\boxed{1}) = \boxed{2} \text{ VP [F: } s = f_b < r \text{]} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

- (12) g : 最終到達点が(客観的に)定義されないイベントに、話者の主観によって最終到達点を認定する関数

kir_{Asp} が、補部イベントが予め持つ最終到達点を指すだけなのに対して、 kir_{Mod} は、本来最終到達点が定義されないイベントに対して話者が(強制的に)それを認定(NTSのAを参照)した上で、それより後の1点を指す。例えば、「疲れる」という最終到達点が本来定義されないイベントの場合、話者の主観で(強制的に)最終到達点を認定することが主体役割(A)の値として指定されている。このように、「-切る」が補部イベントを強制的に終結点を持つようなものに変更するということになるので、理論的には、Pustejovsky(1995)におけるタイプ強制の操作が行われていると考えられる。そして、その認定された到達点より後の1時点を指すことがFの値として指定されている。

また、 kir_{Asp} が最終到達点を指すのに対して、 kir_{Mod} は「最終到達点より後の1点」を指すという違いが示されているが、これは以下のことから裏付けられる。

- (13) kir_{Asp} : 主文に生起するのに制限がなく、過去を表す「た」と問題なく共起する。

- a. ナオミは{その難しい曲を/2時間}踊り切った。
- b. 健はケーキを10個食べ切った。
- c. アイスcreamが溶け切った。

(14) *kir_{Mod}*: 主文では「-切っている」「-切っていた」でなければならず、「た」の場合は連体節でなければならない。

- a. ?*健は疲れ切った。 cf. 健は疲れ切っていた。/疲れ切った体
- b. *水は澄み切った。 cf. 水は澄み切っていた。/澄み切った水
- c. *健は困り切った。 cf. 健は困り切っていた。/困り切った態度

(13)と(14)の違いから、*kir_{Mod}*と共起する「た」は時制(過去)ではなく「結果状態の焦点化」(金水 1994)を表すことが示唆される。つまり、*kir_{Mod}*は「話者がそれ以上変化しないと認定した最終時点より後の時点」を指すということである。そのため、主文において単純過去を表す「た」とは整合せず、「た」の場合は連体節のみにしか生起できず、主文で用いられる場合、焦点化された結果状態を指す「ている」「ていた」でなければならないと考えられる。

3.4. 統語構造

ここまでで「切る」に対して2つの語彙登録を想定したが、本節では、統語構造においても2つの「-切る」は異なる構造を取ることを示す。本論が分析の土台とする岸本(2013)は、影山(1993)を批判的に論じ、影山のVP/V'補文の違いを統語構造ではなく動詞の格素性で説明している。岸本は、動詞が取る補文の種類によって非対格型とコントロール型の2つに大別し、後者を非能格型と他動詞型に細分し、他動詞型では主要部移動が起こり、格素性の転移や同定が行われるとしている。岸本の分析で重要になるのはV1のみの受身、全体の受身、V2の対格認可能力の3つである。

	例	V1 受身	全体受身	V2 対格認可力
他動詞型	終える/直す/尽くす	*	√	√
非能格型	損ねる/そびれる	√	*	*
非対格型	かける/だす	√	*	*

この表にしたがって2つの「-切る」を比べると次のような違いが見られる。

(15) *kir_{Asp}*:

- a. **V1 受身**: *論文が書かれ切った。/*料理が食べられ切った。
- b. **全体受身**: 論文が書き切られた。/料理が食べ切られた。
- c. **V2 対格認可**: 予定の電車すべて{に/?を}乗り切った。/
{*難局に/難局を}乗り切った。

(16) *kir_{Mod}*:

- a. **V1 受身**: 信じられ切った (噂)/ 親に頼られ切っている / 言い古され切った (諺)
 b. **全体受身**: ?*信じ切られた (噂) / ?*親に頼り切られている /
 *言い古し切られた (諺)
 c. **V2 対格認可**: { その問題に / *その問題を } 困り切っている⁵。

以上から、*kir_{Asp}* は他動詞型補文構造、*kir_{Mod}* は非対格型もしくは非能格型という異なる補文構造を取ると考えられる。

4. 「V-ぬく」の意味構造と統語構造

4.1. 問題点の所在

まず、統語構造について先行研究の問題点を挙げる⁶。影山 (1993) は、統語的複合動詞「V-ぬく」では、「V-終わる」と同様、「殴りぬかれる」という複合動詞全体の受身と (17) に示す補文内部の受身「殴られぬく」が相補分布せず両方の受身が可能なことから、話者によって V' 補文と VP 補文の間で曖昧であると分析している。

(17) ボクサーは自分からは手を出さず、最後まで殴られ抜いた。 (影山 1993, 166)

しかしながら、これについては、話者による容認性の違いというよりも、次の例が示すように補部イベントに対する主語の制御性がより本質的な問題であると思われる。

- (18) a. ?ボクサーは自分からは手を出さず、最後まで殴り抜かれた。
 b. ボクサーは最後まで (チャンピオンに) 殴り抜かれた。

(17) と同様に主語であるボクサーの意図性を表すような「自分からは手を出さず」という表現を伴っている複合動詞全体の受身文 (18a) の容認性が (17) に比べてやや落ちることと、その表現がない (18b) が問題なく容認されることから、両タイプの受身文を容認する理由は単なる話者によるバリエーションではなく、主語の意図性や制御性に関わるもっと根本的なものであると考えられる。同様の例を (19) に挙げておく。

- (19) a. ケンは数年にわたって社長に { 口説きぬかれて/?口説かれぬいて } やっと入社を決意した。
 b. ケンは彼女の言葉に { 騙しぬかれた/?騙されぬいた }。
 c. ケンは彼女の言葉にわざと { ?*騙しぬかれて/騙されぬいて } やった。
 d. ケンは先生に 2 時間に渡って叱りぬかれた。
 e. ケンは?(友達をかばって) 先生に 2 時間にわたって叱られぬいた。
 f. その噂は 10 年もの間 { 信じぬかれた/?*信じられぬいた }。

由本 (2005) は、非対格型の複合動詞の場合には数量詞と V2 の作用域の関係が 2 通り可能である (20a,b) のに対して、VP 補文型の場合には全部否定の解釈の方が自然である (20c,d) ことを指摘している。

⁵ 「頼る」は、二格も対格も取れる (「親 { を/に } 頼る」) ので、このテストが機能しない

⁶ 本節の内容は、日本語学会第 161 回大会における口頭発表内容 (日高 2020) を加筆・修正したものである

- (20) a. メンバー全員が行列に並びかけていた時、突然雨が降りだして、記念写真が撮れなかった。(ALMOST > ALL)
 b. メンバー全員が一斉に立ち上がりかけた時、突然停電になった。(ALL > ALMOST)
 c. ?メンバー全員が雛壇に並びそこなったので、記念写真にならなかった。(NOT > ALL)
 d. メンバー全員が決められた時刻に行列に並びそこなったので、チケットが一枚も買えなかった。(ALL > NOT)

(由本 2005, 185, 括弧の記述は筆者)

このテストを「V-ぬく」に適用すると、(21)が示すように全部否定の解釈が自然なように思われる。

- (21) a. クラブメンバー全員がそのレースを走りぬけなかった。(NOT > ALL)
 b. その戦闘では、全ての兵士が生き残れなかった。(NOT > ALL)

このことから「-ぬく」はVP補文を取ると考えた方が妥当であると思われる。後に統語構造についての具体的分析を提示する。

次に意味構造に関する先行研究を検討する。森田(1989)、姫野(1980, 1999)、杉村(2013)は、V1が意思動詞か無意思動詞かで「完徹」と「極度」に分類している。

- (22) a. **完徹**：意思を「つらぬくという意味が含まれており、「～ぬく」は「うごきが持続され最終段階に至ることを示すが、それに対する逆流(抵抗、困難な条件)のあることがなんらかの程度に予定される(城田 1998, 145)。逆流に際し、ある期間最後まで当人の強固な意思に支えられて何かが行われることを表す。したがって、期間の長さを示す語を伴うことが多い。
 ex. 愛し～、憧れ～、いじめ～、嫌い～、惚れ～、憎み～、恨み～、口説き～、信じ～、疑い～、だまし～、誉め～、鍛え～、しごき～、etc.
- b. **極度**：「非常に、とことんまで」という強い程度を表す。前項動詞は、人の精神状態を表すもので、マイナス評価を表す語が多い。「～ぬく」は状態を表すのであるから無意思動詞となるので、「知りぬきたい」「承知しぬいてください」というような意思表現はできなくなる。
 ex. 苦しみ～、困り～、弱り～、悲しみ～、もめ～、知り～、承知し～、退屈し～、ひがみ～

(姫野 1999, 186-188)

これに対し、白石・松田(2014)は、「完徹」も「極度」も根底には同じイメージがあり、それが文脈上で異なって見えるだけであるという立場をとり、認知言語学の枠組みにおいて基本的に両方とも同じ図式で説明している。

以上のことから、本論の目的からすると次のような解決すべき問題があると考えられる。

- (23) a. 「完徹」と「極度」の分類は妥当か？
 b. 「困難性」の意味合いをどう扱うか？

c. それらを踏まえて意味構造をどう形式化するか？

以上、先行研究の問題点を論じた。以下では、「ぬく」は一律に VP (vP) 補文構造を取ること示し、意味構造においては、先行研究(森田(1989)、姫野(1980, 1999)等)における直観的な分類に対して理論的根拠づけを与えつつ再構成し、それに対する解決策を提示する。

4.2. 統語構造

統語構造としては、影山(1993)の VP/V' 補文分析、由本(2005)の V0 補文分析に対して、本論では、「ぬく」は一律に VP (vP) 補文を取ること示す。先述したように、岸本の分析では VP 補文を取る動詞が作る複合動詞は複合動詞全体の受身は許すが V1 のみの受身は許さないの、本論の主張である VP 補文説にとって問題になるのは、(17)の「殴られ抜く」等のような例が容認されるという事実である。本論では、その場合の「られ」は畠山・本田・田中(2018)のいう使役を表す「られ」であるとするこによって、VP 補文分析が支持されることを示す。

畠山・本田・田中(2018)は、多言語で受動と使役が同一形式で表される場合が多く観察される Washio(1993, 1995)ことから、「られ」に多義性を認め、使役の意味を表す形態素としても分析し、受身文について次の2つの統語構造を提案している。

- (24) a. [_s ジョン_i はわざと [_s トラックに pro_i 追突さ] れた] 《使役の意味》
 b. [_s ジョン_i は不運にも [_s トラックに t_i 追突さ] れた] 《受動の意味》
 (畠山・本田・田中 2018)

ここで「V-ぬく」の文における V1 のみの受身の可否について観察するが、まず、「ぬく」の性質として、主語が意図性を持つものでなければならず、多かれ少なかれ補部イベントを制御できる必要がある。

- (25) a. *ケンはずべての試験に { 滑り/落ち } ぬいた。
 b. *ケンはずべての右手の骨が折れ抜いた。
 c. *早産だったが赤ちゃんは無事生まれ抜いた。
 d. ケンはその問題に弱りぬいて、友人に相談した。(心理状態のみ)
 cf.1 *ケンは病気で { 弱り/衰弱し } ぬいて、声も出せなかった。
 cf.2 ケンは病気で { 弱り/衰弱し } きて、声も出せなかった。
 e. マリはそのアイドルに憧れぬいて、服装から何からすべて真似するようになった。

このように、「ぬく」は意図性を持つ主語を選択するので、主語が補部イベントに対するコントロールを持たないと判断される場合は V1 のみの受身が不可能である。

- (26) a. ?*ケンはずべての恋人に 10 年に渡って信じられぬいた。
 b. *その話は 10 年にわたって信じられぬいた。
 c. *その子どもは 10 年にわたって容疑者宅に隠されぬいた。

以上のことから、「V られぬく」の「られ」は、畠山・本田・田中 (2018) の分析における「使役」を表す動詞として分析することが妥当であると考えられ、(27c) のような統語構造を持つと想定される。

- (27) a. ナオミがケンを騙しぬい(た)。
 $[_{VP}$ ナオミ $[_{VP}$ PRO $[_{V'}$ ケン 騙す $]]_V$ ぬく]
- b. ケンがナオミに騙し抜かれ(た)。
 $[_{PassP}$ ケン $[_{VP}$ ナオミ $[_{VP}$ PRO $[_{V'}$ e_i 騙す $]]_V$ ぬく $]_{pass}$ られ]
- c. ケンがナオミに騙され抜い(た)。
 $[_{VP}$ ケン $[_{CauseP}$ PRO $[_{VP}$ ナオミ $[_{V'}$ e_i 騙す $]_{cause}$ られ $]_V$ ぬく]

さらなる証拠として、「V-られぬく」は、使役の「させ」と同様、動作主(使役主)を「によって」で表すことができない。

- (28) a. そのラウンドじゅう、挑戦者はチャンピオン{に/によって}殴りぬかれた。
 b. そのラウンドじゅう、挑戦者はわざとチャンピオン{に/?*によって}殴られぬいた。
 cf. そのラウンドで、挑戦者はわざとチャンピオン{に/*によって}殴らせた。

以上から、「-ぬく」は VP 補文を取り、一見 V1 受身を許すように見える例の「られ」は畠山・本田・田中 (2018) における使役を表す形態素であると言えるだろう。

4.3. 意味構造

本論では「-ぬく」に対して2つの語彙登録を提案する。まず1つめは(29)で、(30)が(29)における各項目の説明である。

$$(29) \left[\begin{array}{l} \text{-nuk}_i \\ \text{ARG} = \boxed{1} \text{ VP} [F: s < f_b = r \vee s < f_b < r] \\ \text{QL} = \left[\begin{array}{l} \boxed{2} \text{ TS} = \left[\begin{array}{l} F: \text{POINT: nuk}(\boxed{1}) = f_b - s \\ C: \text{CONTROL}(x, \boxed{1}) \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} A: \text{FEEL TOUGH}(spk/x, \boxed{2}) \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

- (30) a. ARG: 補部となる動詞句が継続の意味を表し、限界点が定義される (f_b)。
 b. F: 「ぬく」は補部イベントの開始から終了時までを視野とする。
 c. C: 主語となる x が多かれ少なかれ補部イベントを制御 (CONTROL) する。
 d. A: 話者や主語が「ぬく」を含むイベント全体 ($\boxed{2}$) を困難であると認識している。

(23b)で課題とした「困難性の意味合い」は、主体役割(A)の内容から読み取られる。また、「られ」が使役の「られ」である場合、構成役割(C)にある「-ぬく」の制御性(CONTROL)という性質と合致して容認されるが、「られ」が受身の場合には制御性がないので「ぬく」のCONTROLとミスマッチを起こし、容認性が落ちる。つまり、前節で議論した「V1のみの受身文の分布の狭さ」の理由がこの意味構造からも読み取られる。

もうひとつの登録と各項目の説明は(31)、(32)である。

$$(31) \left[\begin{array}{l} \text{-}nuk_2 \\ \text{ARG} = \boxed{1} \text{ VP} \left[\begin{array}{l} \text{F: } s = f_{ub} < r \\ \text{C: EXP } (x, [P_{Sy.St.}]) \end{array} \right] \\ \text{QL} = \left[\begin{array}{l} \text{TS} = \left[\begin{array}{l} \text{F: POINT: } nuk(\boxed{3}) = f_b - s \\ \text{C: } \phi \end{array} \right] \\ \text{NTS} = \left[\begin{array}{l} \text{A: FEEL TOUGH } (z/x, \boxed{2}), \\ g(\boxed{1}) = \boxed{3} \text{ VP} [\text{F: } s = f_b < r] \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

- (32) a. ARG: 「弱る」「困る」等の、変化自体は瞬間的だが限界点が定義されず (f_{ub}) 経験者 (EXP の項である x) を持つ心理動詞を主要部とする動詞句を補部とする。
- b. F: 「ぬく」は補部イベントの開始から「主観的に定められた限界点」までを視野とする⁷。
- c. C: 「-ぬく」自身はアスペクト以外の具体的な意味内容がなく、補部との意味合成 (単一化) の際には、補部イベント ($\boxed{1}$) が代入される (制御性はない)。
- d. A: 話者が (主観的に) 補部イベントに限界点を付与する。また、話者や主語が「ぬく」を含むイベント全体 ($\boxed{2}$) を困難であると認識している。

以上のように本論では「-ぬく」に対して2つの語彙登録を仮定したが、それは次のような帰結を持つ。

- (33) a. 先行研究における「完徹」と「極度」の分類をアスペクトを軸に再編成することになる。
- b. nuk_1 は本動詞「抜く」の持つ意図性や制御性を保持している一方、 nuk_2 は構成役割 (C) に意味が登録されておらず、意図性や制御性を持たない。文法化の観点から見ると、 nuk_2 の方がより文法化が進んでいる。
- c. 以上を踏まえると、文法化の観点から見た場合、姫野 (1999) 等と本論の分類の妥当性を比較検討することが可能になり、文法化過程を探る足がかりとなる。

5. 形式的意味表示と文法化-まとめに替えて

本論ではイベント終了付近に言及し類似の意味を持つ「V-切る」「V-ぬく」という2つの統語的複合動詞の意味構造と統語構造を議論してきたが、本論の分析を通して次のような理論的帰結や展望が得られる。

- (34) a. 話者の主観によって補部に最終到達点を与える nuk_2 の補部は心理動詞に限られる⁸一方、同様に主観によって最終到達点を認定する kir_{Mod} にはそのよう

⁷白石・松田 (2014) が「「彼は悩みぬいた」「A校は苦しみぬいた」などは不完全な印象が残るが、「問題が解決するまで、悩みぬいた」「優勝するまで、A校は苦しみぬいた」のように終着点を文脈に加えると自然な文となる。」と指摘するように、この「-ぬく」は、本論に沿って述べれば、主観的に付与された限界点を明示するような表現があった方がより自然な文となる。これは、限界点を非命題の意味部門である目的役割 (T) の値として付与するため、それを命題レベルでも明示した方がより容認されやすくなるためかもしれない。一方、同じように T の値として主観的に限界点を定める kir_{Mod} ではそのような現象が見られないが、それは kir_{Mod} が指す時点が限界点より後の1点であるため、限界点そのものは明示する必要がないからではないかと思われる。詳しい議論は今後の課題としたい

⁸詳細な理由は不明だが、明確な意図性・制御性がなくても外項主語という特性を保持しているのかもしれない (影山 (1996) では、経験者主語は意図性・制御性がなくとも外項として分析される)。

な制限がない。このことから、文法化の観点からすると「-切る」の方が文法化が進んでいることがうかがわれる。

- b. 2つの「-切る」が異なる統語構造を取るのに対して、2つの「-ぬく」は異なる統語構造を取るとは考えにくい(3.4節)。これは、「-切る」に比べて「-ぬく」には本動詞が持っている意図性や制御性が残っているため、「-切る」のような(完全な)アスペクトマーカ―としての補助動詞的な存在にまでなっていないことを反映していると思われる。
- c. 「-ぬく」は、命題的意味の他にも目的役割(T)や主体役割(A)といった非命題的意味内容も比較的豊かに持つので、純粋なアスペクト動詞というよりもむしろ本動詞に近いと言える。

以上のように、本論で用いた形式的意味表示は、非命題的な意味を含めて先行研究よりも精密な意味記述を提供するため、動詞間の意味のより明示的な比較を容易にすると同時に、意味構造と統語構造との関係についても具体的な議論を可能にする。また、類似の意味を持つ動詞を比較する際にも明確な対立軸を提供するので、対象となる動詞等の文法化プロセスを議論する際にも、プロセスの中での各動詞の位置付けを容易にする。このことから、本論の用いる理論的枠組みは、アスペクトにかかわる他の(補助)動詞に対しても対象を広げていくことが可能で、それによりさらなる研究の発展が期待できるものと考えている。

参考文献

- Arai, Fumihito and Toshio Hidaka (2016) A formal analysis of Japanese v-yuku and its grammaticalization. *Japanese/Korean Linguistics* 23.
- 郡司隆男 (2004) 「日本語のアスペクトと反実仮想」 *TALKS: Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin* 7: 21-34.
- 畠山雄二・本田謙介・田中江扶 (2018) 「使役を表す「受動文」」『言語研究』154: 193-204.
- Hidaka, Toshio (2011) Word formation of Japanese v-v compounds. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.
- 日高俊夫 (2017) 「統語的複合動詞「V-切る」における意味構造と統語」 *KLS* 37: 169-178 関西言語学会.
- 日高俊夫 (2020) 「統語的複合動詞「V-ぬく」の意味と統語」『日本言語学会第161回大会予稿集』: 313-318 日本言語学会.
- 姫野昌子 (1980) 「複合動詞「～きる」と「～ぬく」, 「～とおす」」『日本語学校論集』7: 23-46.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房.

Igarashi, Yoshiyuki and Takao Gunji (1998) The temporal system in Japanese. In: Gunji, Takao and K. Hashida (eds.) *Topics in constraint-based grammar of Japanese*, 81–97: Kluwer.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.

影山太郎 (1996) 『動詞意味論: 言語と認知の接点』 5 くらしお出版.

金水敏 (1994) 「連体修飾の『～タ』について」『日本語の名詞修飾表現』: 29–65 くらしお出版.

岸本秀樹 (2013) 「統語的複合動詞の格と統語特性」『複合動詞研究の最先端–謎の解明に向けて』: 143–184 ひつじ書房.

李景洙 (1997) 「中間的複合動詞「きる」の意味用法の記述: 本動詞「切る」と前項動詞「切る」、後項動詞「-切る」と関連づけて」『世界の日本語教育』7: 219–232.

梅麗莉 (2015) 「主体的意味の顕在化–複合動詞「-切る」を例に–」『日本言語学会第151回大会予稿集』: 146–151 日本言語学会.

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*: MIT Press.

志賀里美 (2014) 「複合動詞「～切る」における文法化の過程についての一試案」『学習院大学人文科学論集』23: 41–65.

白石知代・松田文字 (2014) 「多義動詞「ぬく」のコアとそれを用いた複合動詞「V-ぬく」の意味記述–L2 学習者の意味推測を支援するために–」『日本語教育』159: 1–16.

城田俊 (1998) 『日本語形態論』 ひつじ書房.

杉村泰 (2008) 「複合動詞「-切る」の意味について」『言語文化研究叢書』7: 63–79.

杉村泰 (2013) 「コーパスを利用した複合動詞「V1-抜く」の意味分析」『言語文化論集』35, 1: 49–63.

Washio, Ryuichi (1993) When causatives mean passive: A cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 2 1, 45–90.

Washio, Ryuichi (1995) *Interpreting Voice; A Case Study in Lexical Semantics*: Kaitakusha.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房.

(受付日: 2021 年 12 月 10 日)